

<b>Title</b>	序：モダナイゼーションかポスト・モダンか
<b>Author(s)</b>	大木, 英夫
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所紀要, No.7, 1995.3 : 3-4
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3026">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3026</a>
<b>Rights</b>	

SERVE

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## 序——モダナイゼーションかポスト・モダンか

本号には、聖学院大学と女子聖学院短期大学の英語教育に関する論文が掲載されている。野呂有子氏はミルトン研究者として総合研究所の活動に深く参与しておられる方である。

偶然ながら、本号において、近代世界の理解に関する二つの見方が競合することになった。日本を、依然として「モダナイゼーション」の過程において捉えるか、それとも「ポスト・モダン」の典型として捉えるか、こういう二つの見方である。それは何も日本の状況の認識に限定されないだろう。世界全体の認識に関わるというべきであろう。「自由の伝統について」は前者の見方を背後にもっており、コスロフスキー教授の「宗教、経済、倫理」は後者を代表している。コスロフスキー教授の発題をめぐるわが国の学者のコメントと討論は、「ポスト・モダン」の見方をめぐって相当高度なレベルの議論である。もちろんさらに突っ込んで議論されるべき問題は幾多残されている。しかし本研究所が主催してこのような有意義な国際シンポジウムを開催できたことをたいへん嬉しく思う。

モダナイゼーションか、ポスト・モダンか、この見方の相剋は、現代の問題との取り組みの仕方に深く関わる。時代の「診断」は、その病状に対する「療法」に違いが生じるであろう。社会の現状を、歴史的に動的に捉えるかそれと

も社会的に静的に捉えるか、通時的に捉えるかそれとも共時的に捉えるか、現象面を觀察記述するかそれとも社会の深層における變動を洞察究明するか、同じ社会状況でも違った認識と解釈が成り立つてであろう。コスロフスキー氏は、日本の近代化にポスト・モダンの現象をみているようだ。しかし、それはバブル景気当時の日本のありさまではなかったか。キルケゴールは、'Our age is a tragicomedy. Tragic because it has failed a long time ago; comic because it still exists.' という言葉を残したが、宗教や倫理の深層から見れば、キルケゴールのこの言葉が、より日本に妥当するように見える面もあろう。

戦前、日本に「近代の超克」という論議があつた。それは一九四五年以後の近代化の大潮にのまれて過去へ押しやられた。いま「ポスト・モダン」の議論が流行している。それは「近代の超克」論とは異なるであろう。いずれにせよ、本号では「モダナイゼーション」と「ポスト・モダン」が競合している。この競合は、決して不毛な議論に終わらないであろうし、また終わらせるべきではないと思う。

聖学院大学総合研究所長

大木 英夫